



☐あかるく元気な子 ☐だれにも親切な子 ☐しつかり考える子 ☐ことばを大切にする子

耳と心をすませば…



台風や秋雨前線の影響により毎日のように雨が降り続く中で、道ばたや田んぼの畦にちらほらと彼岸花が咲き始めています。その姿を見ていて、ふとこんな文章を思い出しました。

夜道を歩いていたら、植え込みで「チン、チン」と鳴いている。今年はじめて聞くカネタタキだ。コオロギの仲間で、鉦をたたくように鳴く。立ち止まって耳をすますと、別の葉陰からもチン、チン…。秋が耳の奥へ広がっていく。

12ヶ月を音のイメージで表した「音の歳時記」という詩が、那珂太郎さんにある。一月は「しいん」。厳冬に天地は静まる。二月は「ぴしり」。春が兆して氷が割れる。三月の「たふたふ」は雪どけの川。詩人の感性は、さすがにみずみずしい。

四月は「ひらひら」。野を越えて蝶が飛ぶ。五月は「さわさわ」と風が渡る。六月「しとしと」。七月の「ぎよぎよ」は蛙の合唱だ。そして八月の「かなかなかな」から、九月は「りりりりり」。音の呼びさます季節感も趣は深い。

その詩さながらに、東京ではここ数日で、樹上の吹奏楽から草むらの弦楽に楽団が変わった。カネタタキはささやかな打楽器か。虫の声の移ろいは、太陽の季節から「もののあわれ」の季節への、舞台の巡りを人に教える。

昔は、虫の音にも「聞きなし」があった。リーリーと鳴くコオロギの声を「糸刺せ、針刺せ、つづれ刺せ」と聞いたそうだ。冬着の繕いを急がせる声だという。夜が静かだったころの炉辺の想像である。

那珂さんの詩は、十月「かさこそ」、十一月は「さくさく」と続く。落ち葉と、霜の朝である。十二月は「しんしん」。雪が降って、時の逝く音だそうだ。

心をすませば聞こえるかもしれない。ひびの喧噪から、時には心身を解き放つのもいい。

〈2009.9.5 朝日新聞 天声人語より〉



子どもたちにとっては運動会の練習でまだまだ忙しい日々が続きます。でも、そんなときだからこそ、心にゆとりをもった落ち着いた生活をしたいいものですね。

また、今日は中秋の名月でもあります。月を見て、おだんごでも食べながら、耳をすまし、心をすまし、時が移ろいゆく音を聞いてみるのもいいかもしれません。

